



勘違いの Kanchigai no
工房主 ATIELIER MEISTER
アトリエマイスター

英雄パーティの元雑用係が、
実は戦闘以外がSSSランクだった
というよくある話

12

時野洋輔

Tokino Yousuke

ILLUSTRATION

ゾウノセ

◆ 登場人物紹介 ◆

ユーリシア

クルトの工房に所属する元王家直属冒険者。常識人に見えて暴走しがち。



ミコ

ホームロス王国の第三席宮廷魔術師。



ローレッタ

ユーリシアの従姉で、イセシマ島の島主。



ゴルノヴァ

「炎の竜牙」のリーダー。旧世界で行方不明に。



マーレフィス

クルトが以前所属していたパーティ「炎の竜牙」の一員。旧世界で失踪していたが――



リーゼロッテ

ホームロス王国の元第三王女。自身を呪いから救ったクルトに惚れこみ、王女の座を捨て彼と共に行動する。

アクリ

クルトとユーリシア、リーゼロッテたち三人の娘。その正体は時の大精霊にして大賢者。

クルト・ロックハンス

本人は無自覚だが、戦闘以外の適性ランクが全てSSSという超天才。世界を救っても、相変わらず自分が工房主代理だと勘違いしたまま。

プロローグ

私——マーレフィスの出生はよくわかっていません。気付いた時には孤児院で育っていました。たまたま回復魔法の適性があったため、修道女として働くことが許されましたが、貧乏な修道院です。

お金もほとんど手元に入ってきません。私はこのようなところで終わる人間ではない。この回復魔法は神から授かった力、つまり私は神に選ばれた存在なのだ。そう強く感じた私は、修道院をさっさと出ました。

——それから数年後。

「ありがとうございます、マーレフィスさん」
私の所属する『炎の竜牙』の雑用係であるクルト——クルトはそう言って頭を下げます。

「傷が治ったなら、さっさと魔物を運びなさい。まったく——」

しかし私はそう悪態をついて、狩った巨大な熊の魔物、アーマードベアをクルに運ばせませす。五百キロはあるかという、アーマードベアの中でも大型の個体ですが、クルは難なく持ち上げます。

クルは戦闘能力は全くないにもかかわらず、どういうわけか物を運ぶ力だけはあるのですよね。普通、荷物運びを専門とするポーターでも、こういう魔物を運ぶ時は荷車なり専門の道具なりを使うものだと思いますが……

「ポーターなんやからこのくらい普通やで」

バンドナにそう言われているうちに、これが普通なのだと思います。

今にして思えば、そんなわけありませんのに。

——今にして思えば？

ああ、これは過去の夢なのです。

少し前の私。

炎の竜牙の一員として戦っていた時の私。

もしもこの時、クルに優しくしていたら——いいえ、無理ですわね。

ゴルノヴァはクルを庇っていつも傷を負っていましたし、バンドナもクルを追放する空気を作っ

ていました。

なにより私も、いつも怪我の原因を作るクルのことを疎ましく思っていました。

彼が追放される流れを変えることはできなかったでしょう。

夢の場面が切り替わります。

今度は、トリスタン司教が私にワインを注いでいます。

「それは呪毒が含まれています！ 飲んではいけません！」

この時、私は悪魔を召喚する魔力の供給源として、当時の上司だったトリスタン司教に、ワインを使って呪いをかけられてしまったのです。

私はそう訴えかけますが、夢の中の私はトリスタン司教も、自分が司祭になることも疑いもせず、ワインを口に含んでしまいます。

それからは地獄でした。

呪毒に体を蝕まれ、何も食べられない苦痛、そして信じていた教会に裏切られたことへの絶望。

「つて、これはなんなのですか？ 夢ならもっと楽しい夢を見せなさい」

声を上げるが、反応はありません。

そういえば、人は死ぬ間際、人生を振り返る夢を一瞬のうちに見ると聞いたことがあります。

私、これから死ぬのですか？

そういえば、全身が痛いような気がします。

嫌です、死にたくありません。

——誰か！ 誰か私を助けなさい！ ゴルノヴァー！ バンダナ！

しかし返事はありません。

——早く、誰か助けるのです！

私は混乱しながらも、ある一人の少年の姿が脳裏をよぎりました。



「クル——！」

「うわっ!？」

私が彼の名前を叫ぶと、聞き覚えのない男性の驚く声が耳に入ってきました。

目を開けると、ここは——馬車の中？

声のした方を見ると、やはり見覚えのない男性がいました。

「よかった。姉さん、気が付いたんだな」

「ええ……ここはどこですか？」

「どこって……俺の竜車りゅうしゃの中だよ。これから第七十七居住区に向かうところだ」

竜車？ 第七十七居住区？

少しずつ頭が鮮明になってきます。

そうです！ 私とゴルノヴァーは大賢者の弟子となり、共に旧世界にやってきて、生き残りの人を探していたのです。

誰も見つからないと思っていましたが、まさかこんな簡単に見つかるとは。

しかも言葉も通じるようです。

「その、第七十七居住区ってところには人がいるのでしょうか？」

「ああ、五千人くらいかな？ この辺りの居住区の中ではかなり多い方だぞ」

「ごせ——っ!? そんなにですか」

第七十七区ということは、他にも居住区があるのかもしれない。

これだけ多くの人がいるのなら、一度バンダナのところに戻って報告をした方がよさそうですね。

……？

「ところで、私はどうしてここに？」

「姉さん、覚えてないのかい？ 街道の真ん中でマスクもせずには気絶してたんだよ。俺はてっきり

邪素に侵されて死んでると思ったよ」

「邪素？」

「ああ、この童車の中なら平気だ。輸送隊の御下がりだが童車の中には邪素が入ってこない仕組みになってる。幌が邪素を吸引してマスクの代わりをしてくれてるんだ」

おそろく、邪素というのは瘴気のことでしょうね。

聖職者である私は瘴気に多少は耐性がありますし、瘴気に対抗するための薬や魔道具もバンダナから預かっているので平気ですが、普通の人間はそうではないでしょう。

しかし、私はなぜ街道の真ん中で寝ていたのでしょうか？

思い出せません。

「ゴルノヴァ——私の連れはどこにいますか？ 赤い髪の、いかにも賞金首って風体のガラの悪い、性格はもつと悪い剣士ですが」

「赤い髪の剣士？ いや街道で倒れていたのは姉さんだけだったよ」

ゴルノヴァがいない？

まさか、私を置いて逃げたというのでしょうか？

彼ならありえない話ではありません。

少し改心したところはあるでしょうが、彼の根本は野蠻で粗暴な剣士ですからね。

信仰を捨てたとはいえ、聖職者の私とは根本が違います。

それより、まずはバンダナのところに戻らないと——

「そういえば、お礼を言ってませんでしたわね。私はマーレフィスと申します。あなたは？」

「俺は本屋だ。名前はブックマン」

「……本名ですか？」

「本名みたいなもんだ。みんなそう呼んでるし、覚えやすいだろ？」

「では、この荷は全て本ですか？」

私は馬車のスペースの大半を占めている木箱を見て、そう言いました。

私たちの世界では本は貴重な品でしたが、旧世界ではそうではないのでしょうか？

だったら、こちらの世界で買い付けした本を持っていけば、稼げるのではないのでしょうか？

私はこちらの世界で使えるお金を持っていませんが、金貨ならばどこでも使えるでしょう。

「いいや、ここにあるのはほとんど紙だよ」

「紙？ まさか、あなたが書き写して販売をするのですか？」

「正解」

ブックマンはそう言って頷きます。

一体一冊作るのに何日かかるのか。

転売で荒稼ぎするのは難しそうですね。

そういえば、この前バンドナに教えてもらいましたが、クルなら平均的な本なら一分もかからずに複製するそうです。

そのことを知っていたら、クルを使って荒稼ぎできましたのに。

まったく、バンドナが隠していたせいでお金を稼ぐ機会を失いました。

「姉さんに見せてやるよ」

ブックマンがそう言って、木箱の中から紙の束を出します。

これから書き写すのでしょうか？ 時間がかかりそうです。

「見せていただけなくても結構です」

「まあそう言うなって。俺の唯一の特技なんだから」

そう言ってブックマンは本に手を当てて、「《転写》」と呟くように言います。

すると、紙に文字が浮かび上がりました。

これは一体っ!?

「どうだ、凄いだろ」

「これは魔法ですか？」

「姉さん、もしかしてスキルも知らないのか？」

魔法ではなくスキル？ この世界には魔法とは違う能力体系でもあるのでしょうか？

詳しく聞こうとしたその時でした。

「あら？ あなた、その右脚——」

ブックマンの右脚が少し不自然です。

おそらく臆が切れていますね。

「ああ。ちょっと前にハマして動けなくなっただけ。まあ、お陰で童車の外で歩かなくて済むのはありがたいよ」

ありがたいって顔ではありませんわね。

仕方ありません。

助けていただいたわけですし、一方的に借りを作るとあとで何を請求されるかわかりませんか
らね。

「私が治療いたします」

幸い、私がずっと使っているユニコーンの角杖も一緒に回収してくれていたらしく、隣に置いて
ありました。

「あなた、薬師かい？ 悪いが、一流の薬師に見てもらっても俺の脚は——」

「《ヒール》——」

私がユニコーンの角杖を持ってそう言うと、ブックマンの脚を淡い光が包みます。私にとつては当たり前前の光景ですが――

「うわあああああつ!?」

ブックマンにとつてはそうではないらしく、大きな声を上げました。荷車が止まります。

「どうしたっ!?」

「なにかあったのっ!?」

「どうしたんだ、ブックマン」

幌の前後の幕が開き、十人ほどの人が集まってこちらを見てきました。

御者がいることはわかっていますでしたが、結構大所帯でしたのね。

御者の前には――陸竜? 二足歩行の馬のようなサイズの竜がいました。

竜車と言っていたのは、そういうことだったのですか。

私が冷静に観察をしていると、ブックマンが狭い竜車の中で立ち上がりました。

「治ってる!? 脚が、俺の脚が治ってる!?!」

「どういうことだ!?!」

尋ねる皆に、ブックマンは「この方が不思議な力で俺の脚を治してくれたんだ」と言いました。

この世界にあるスキルには、きっとこのような治癒ちゆの力はないのでしょう。

「それはよかったですわね。私を助けていただいたお礼はこれで十分でしょうか? もっとお礼を

したいというのであれば葡萄酒ぶどうしゅを――」

そこまで言いかけた時、ブックマンが床にこすりつけるように頭を下げています。

「聖女様とは知らず、失礼な物言い申し訳ございませんでした」

「はい?」

教会を見限り、信仰を捨てた私が聖女……ですか?

第1話 旧世界の難民と聖女の噂うわさ

僕——クルト・ロックハンスは、リーゼさん、ユーリシアさん、アクリと一緒に、また旧世界にやってきた。

僕たちが住んでいた世界は、実は五千年程前にできたばかりの新しい土地で、元々あった世界の上に作られたものなんだとか。そこへ元の世界から人々が移住してきたらしい。

その元の世界というのが、今いるこの旧世界のことだ。

僕たちは以前、旧世界の調査に出て消息不明となっていたゴルノヴァさん、マーレフィスさんを探しに、旧世界へとやってきた。

二人は見つからなかったけど、ミレさんという僕たちの世界——地上と呼んでいる——出身の子を見つけたり、他にも地上出身の人がいたみたいでその情報を探したりと、何度か旧世界と往復をしている。

今回は、ミレさんの出身地であるヤマトの国へ行ってきて、また旧世界に来ているわけだけど、実はヤマトの国から帰ってきてから、かなり時間が経ってしまった。

……それには理由があるんだけど。

「ようやくミミコさんの説得が終わりました」

そうリーゼさんがため息をついていた。

旧世界は何があるかわからない。

リーゼさんは『元』とはいえ、ホムーロス王国の第三王女。

当然、宮廷魔術師のミミコさんは、そのような危険な場所にリーゼさんを行かせることに反対していた。

最初に僕たちが旧世界に来た時は、こっそり出てきたものだから、ものすごく叱しかられたっけ。

その後も、リーゼさんはこっそり荷物に紛れて出てきたものだから、またまた怒られた。

それで今回は、出発する前に、ミミコさんと話し合いの場が設けられたのだ。

ミミコさんは、リーゼさんに護衛をつけようとしたんだけど、護衛と一緒に行くにも大きな問題があった。

それは、移動手段だ。

僕たちの世界から旧世界に行くには、賢者の塔経由で移動するか、もしくは大精霊ドリアードの分体であるニーチェさんが作っている地脈の流れを利用して、アクリの力で転移する必要がある。

しかし、アクリが転移できるのは、実は四人までという制約がある。

実際、ミレさんと一緒に僕たちの世界に移動する時も、二度に分けて転移した。

しかもアクリは、一度転移すると次に転移するまで少し時間を置かなければいけない。

普段なら時間をかけて二回に分けて転移したらいい話だが、非常時だとそうはいかない。

最悪、護衛を見捨てる決断を迫られる。

ファントムの皆さんなら、「どうぞ自分を捨て右に使ってください」と言ってくれそうだが、そんな決断、僕にはできない。

結果、なんとかミミコさんを説得し、「危なくなったらすぐに逃げる」「定期的に地上に戻って報告をする」「ユーリシアさんが護衛として全責任を持つ」「危ない話には首を突っ込まない」等を条件に、旧世界に行くことを許してもらったのだ。

「パーティーは四人まで……か」

僕は今回の件を顧みて、思わずそう呟いた。

かつて僕が炎の竜牙を追放されるきっかけとなったのも、その制約によるものだ。新しい魔法使いを雇うためには、四人目の枠を開ける必要があるからって。

でも僕は、炎の竜牙のメンバーのことは恨んでいない。

今回も、炎の竜牙のリーダーであるゴルノヴァさん、修道女のマーレフィスさんを探しに来ているわけだし……どうか無事にいてくれたらいいんだけど。

「そうか、ミレは自分の故郷を見つけたのか。それはよかった」

第三十八居住区に戻って、区長のハーレルさんに一連の話をすると、彼はそう言った。

表情だけだと事務的に答えているだけにも思えるが、なんとなく嬉しそうにしている気がする。

「それで、人面樹による邪素の中和計画だが、本当に可能なのか？」

「はい。我々の研究によりますと、人面樹一本あたりの邪素の吸引範囲は約五十メートル。そのため、念のために三十メートルおきに人面樹を植えれば、街道に限り邪素が完全に浄化され、邪素吸着マスクなしに居住区間の往来も可能になります。既に第二百五十七居住区の区長であるダイナー様には話を通してありますので、人面樹による両区間間の街道整備は可能です」

ハーレルさんには、邪素——瘴気を吸収して無害な空気に変える人面樹を植えることで、邪素を気にせず通れる街道を作る計画を話したところだった。

「しかし、魔物なのだろうか？ 襲われる心配はないのか？」

「伐採しようとしなければ襲われる心配はありません。それどころか、人間が人面樹の繁殖の手伝いをするのであれば、自分たちの果実を提供してくれるそうです。人面樹の果実は栄養価が豊富で、とても甘くて美味しいですよ」

僕はそう言って人面樹たちから貰った果実を取り出すと、ナイフでささっと皮をむいて八等分に

してお皿に載せる。

ハーレルさんは訝し気な目で――

「今のは――」

「え？ 普通に切っただけですけど？」

○・一秒くらいで。

変な動きをしたのかな？

それとも、人面樹の果実だから警戒しているのかな？

「いや、何でもない。ただくとしよう」

ハーレルさんはそう言つて果実を運び、シャリシャリと音を立てて味を確認する。

「……………なるほど。これは美味だ。それにとってもいい香りもする。これでジャムを作れば美味しくだな。これだけ糖度があれば砂糖も必要ないだろう」

彼はそう言つて、もう一口食べる。

ジャムか。たしかに美味しそうだね。

「……………わかった、君たちの取引を受けよう。それで、いくら支払えばいい？」

「必要ありません。街道が安全になることは、僕たちにとってもメリットの方が大きいです。ですが、可能なら賢者の、いえ、悪魔の塔に向かって、人面樹を植えていつてほしいのです。このこと

はダイナーさんにはまだ伝えていませんが」

賢者の塔――この世界の人たちには悪魔の塔と呼ばれてるんだっけ。

「悪魔の塔か。たしか、あそこは近付けば塔の魔女に襲われると聞いた気がするが――」

え？ 塔の魔女？

そんな人がいるなんて聞いたことはないけど。

「大丈夫だよ。襲われると言つても、最初は警告のための攻撃がされるだけのはずですよね？」

アクリが言った。

もしかして、塔の魔女つてアクリのことだったの？

ハーレルさんが不思議そうにする。

「古い情報によるとたしかにその通りだが……………どうして君がそのことを？」

「人面樹の植樹作業中に襲われることはありません。万が一警告による攻撃が来た場合は、その時点で作業を中断していただいてもかまいません。この悪魔の塔方面への植樹が、人面樹の種をお譲りする対価と考えてください」

アクリがハーレルさんの言葉を無視して、子どもとは思えない――実年齢はこの中で一番年上なのだけれども――ことを言い、ハーレルさんは少し考えた後頷いた。

「わかった。優先順位は他の居住区に繋がる街道より下になるが、必ず成し遂げよう」

将来、大勢の人を地上で受け入れるとなった時、その人たちの移動方法がネックだった。

しかし街道の邪素を排除できるようにすれば、時間はかかるが徒歩で賢者の塔に移動することができる。

あそこからなら地上への移送も楽に行える。

ホームロス王国の受け入れる準備は始まったばかりだし、旧世界の人たちには何の説明もしていないので、これも先の話になりそうだな。

人面樹の種が芽吹き、若木になって瘴気を吸うようになる頃までには、なんとかかなるといいな。そのため、肥料は渡さず種だけを渡した。

自然の成長に任せるつもりだ。肥料がなくても瘴気が濃いこの世界なら直ぐに成木に成長するからね。

「そういえば、ハイルはどうしたんだ？」

ユーリシアさんが尋ねた。

ハールレルさんの息子であり秘書でもある彼の姿はなく、代わりに別の女性が秘書をしていた。

「第二百一十一居住区の再建に伴い、区長になってもらった。ハイルは元々あの居住区の出身だからな。結界装置も直ったことだし、最近は各地から移住希望者が押し寄せてくるようになったから、急いで再建しなくてはいけない」

「移住希望者？」

「ああ。結界装置の動作不良が、各地で確認されるようになったんだ……それで、君たちには別の居住区に行った時は、これを各居住区の区長に届けてほしい。結界装置のメンテナンスのやり方を記してある」

そう言っつてハールレルさんは、封蝟ふうろうされた何十もの封筒をユーリシアさんに渡した。

「助かりますね。これはこの居住区の区長の印ですわ。これを持っていると、新しい居住区に行った時も審査が楽になります」

リーゼさんが言った。

なるほど、通行証みたいなものになるのか。もしかしたらこのハールレルさんのお使いは、僕たちへの感謝の意味を含んでいるのかもしれない。

そうして僕たちは、ハールレルさんと別れると、本来の目的地であった第三十八居住区を目指すことにした。

第三十八居住区には罪人の収容所があるらしく、もしかしたらゴルノヴァさんとマーレフィスさんがそこに収容されているかもしれないからだ。

「元々ゴルノヴァは指名手配犯だし、マーレフィスだって悪魔召か……落書き魔として収監されて

いたことがあるからな」

「ええ、こちらでも何かをやらかして、第三十八居住区に捕まっている可能性は高いです」

ユーリシアさんとリーゼさんは、ゴルノヴァさんたちのことを信用していないんだよね。

とはいえ、ゴルノヴァさんは少しだけ喧嘩っ早いところがあるし、マーレフィスさんもちよつと怒ると街中で使用が禁じられている攻撃魔法を使ってしまう癖があった……絶対にないとは言えないか。

僕たちはまず、第二百五十七居住区に一度転移し、そこから徒歩で移動し始めた。

数時間歩いて山道に差し掛かったところで、焚き火の跡を見つけた。

ここは……まさに僕がワイバーンに攫われた場所だ。

この辺りはワイバーンが多いらしい。

あの時はさすがに危ないって思ったよ。

「ここで休憩にしよう、パパ、ママたち」

アクリが提案した。

「でも、前とは別のワイバーンが来たら……」

「大丈夫だろ。今度はクルトを攫われるようなへまはしないさ。なにより——」

「ええ。ワイバーンさんが来たら、捕まえて移動の足にしましょう」

リーゼさんが頼もしいことを言ってくれたけれど、ご飯を食べている間も、ワイバーンが僕たちを襲ってくることはなかった。

結局、徒歩で山道を登ることに。

しかし、その道も崖崩れがあったのか、半分以上が土砂で埋まっていた。

「荒れた山道だな。気を付けるよ三人とも」

「仕方ありませんわ、ユーリさん。こちらの世界では居住区間の移動を行うのは輸送隊のみですし、邪素のせいで居住区から外に出られない以上、街道を整備することもままなりません」

「そうですね。このくらいなら物資さえあれば五分くらいで修復できますが、その物資を運ぶのも大変でしょうから」

「『……………』」

あれ？ なぜかユーリシアさんたちが温かい目で僕を見ている。

変なこと言ったかな？

「少し和んだところで行くとするか」

「でも、今日中には目的地に辿り着けそうにありませんよ？ とすると野宿……私とクルト様の二人きりのテント生活っ!？」

「鼻血を拭け。テントなんて持ってきてこないし、ニーチェに頼んで転移で地上に戻るに決まってる

だろ」

ユーリシアさんがリーゼさんにティッシュを渡して言った。

ニーチェさんの分木を植えて地脈を繋げれば、いつでも地上に戻れるからね。

僕も工房に残ってるサクラの皆さんの食事の準備や工房の雑用をしないとイケないから、やっぱり野宿はできないや。

そんなことがあって次の日。

僕たちは無事に、第三十八居住区に辿り着いた。

ううん、正しくは第三十八居住区だったところに……かな？

なぜなら、第三十八居住区は既に廃墟はいきよになっていたからだ。

ユーリシアさんがこの世界の地図を開き、第三十八居住区のあった場所に大きなバツを付ける。

見回せば、まともな状態の建物は一割ほど。

あとは扉や壁が壊れていたり、建物全体が半壊、もしくは全壊してただの瓦礫がれきになっていたりする建物もある。

かろうじて残っている城壁も、一部砕けている。

「地図によると、この居住区はまだ無事のはずでしたが……」

「こりゃ、壊れて一年や二年って感じじゃないぞ？ 少なくとも十年は放置されてる」

ユーリシアさんが半壊状態の庁舎らしき建物の中から書類の束を見つけて、その日付を確認しながら言った。

こういう重要機密は本来、持っていけない場合、焼却処分する必要があるけど——
僕も瓦礫の中から書類を見つけて出して調べる。

「これは結界装置の不具合に関する報告書ですね。数カ月おきに結界が消える不具合があったそうです。それでその頻度ひんどがだんだんと高くなってきて——十三年前の報告が最後のようです」

「結界装置の故障が居住区の崩壊の原因のようですね。住民の遺体や争った痕跡こんせきは見つからなかったの、全員無事に逃げられたのでしょうか」

「しかし、ダイナーが知らなかったのはなぜだ？ この周辺にはいくつか居住区があるが、ダイナーがいる二百五十七居住区が一番近いだろ？ 難民が押し寄せてきそうなものだが」

「ワイバーンを警戒したのでしょうか。あの山はワイバーンの狩場になっています。難民の大半は戦える人間ではないでしょうし、ハンターが何人かいても、全員を守って戦うことはできません。

それなら、距離はありますが、比較的安全に避難できる別の居住区に避難しようとする気持ちもわかります」

リーゼさんが地図を見て推論を立てた。

その後、他に何か情報はないか調査した。

まず結果装置を見に行ったところ、結果装置があるはずの建物が崩壊していて、中の機械も大破していた。

元々、この居住区の結界を作り出す装置は僕なんかじゃ理解できない複雑な機構のもので、ここまで壊れていたら修復は不可能だ。

以前修理できたのは、たまたま結果装置が地下の隠し部屋にあったため、魔獣や禁忌の怪物——かつてこの世界を滅ぼそうとした化け物に荒らされずに済んだから無事だったんだよね。

さらにリーゼさんが瓦礫の下に罪人の収容所があるのを発見した。

僕が瓦礫を撤去する。

「アクリとリーゼさんはここで待っていて」

「パパ、私は大丈夫——」

「いいえ、アクリ。ここで待っていきましょう」

リーゼさんがアクリの体を後ろから抱きかかえて、僕とユーリシアさんを見送ってくれた。

そして僕とユーリシアさんは地下に続く階段を下りていく。

「クルト、リーゼとアクリは地上に残ってもらって、私は別にいいってどういうことだ？」

「……ごめんなさい。一人で入るのは少し怖くて」

「別に怒ってないさ。頼りにされるのは嫌いじゃないからな」

ユーリシアさんがそう言って、僕の腕を抱きしめるように掴んだ。

「普段、リーゼと一緒にだとかんなことできないからな。たまにはいいだろ？ 婚約者なんだし」

婚約者。

うう、そう言われたらやっぱり恥ずかしい。

ユーリシアさんやリーゼさんみたいに、綺麗で可愛い人が僕の婚約者なんて。

時々、夢を見ているんじゃないかと勘違いしちゃう。

僕はユーリシアさんの顔を見上げた。

「どうした？」

「い、いえ、なんでもありません」

「そうか。それよりこれは……酷いな」

「はい」

僕たちは牢屋に辿り着いた。

その鉄格子のある扉の大半は、外からの大きな力によってこじ開けられている。

中には無事な牢屋もあったけど、その中に入ったのは白骨死体だった。

どうやらここに収監されていた凶悪犯罪者は他の居住区に輸送されることもなく、この場に放置

されたようだ。

「こりゃアクリには見せられないな……私も階段に入ってようやく気付いたが、クルトはよくわかったな」

「僕はわかりませんでした。ただ、リーゼさんが——」

この收容所の入り口を最初に見つけたリーゼさんが、少しだけ顔を顰めていた。

たぶん、感覚強化コンクセシスの魔法で嗅覚キョウカクを強化して、收容所の場所を見つけて、そして、その強化した嗅覚で地下の状態を察したのだろう。

だから僕は何かあると思って、二人には上で待ってもらうことにしたのだ。

僕は部屋の中を確認して、資料を見つける。

「ありました……どうやらここに収監されていた囚人のうち軽犯罪を犯した人は、住民の移送より前に第六十九居住区に輸送されたみたいですな」

「一番近い第二百五十七居住区でも、次に近い第六十居住区や二百三居住区じゃなくて、第六十九居住区？　ここからだ歩いて一カ月はかかるぞ」

僕が犯罪者の輸送先を確認すると、ユーリシアさんが置かれていた地図を見てそう言った。

この地図……もしかして。

「この第六十九居住区って、もしかして採石場があるんじゃないでしょうか？　おそらく良質な

石が採れる場所かと」

「地図だけでわかるのか？」

「はい。そしてその石が運ばれているのが——この第七十七居住区だと思います」

「たしかに。立地的にも交易の要所という感じがするな。アクリが持っていた古い地図と照らし合わせても大都市があつた場所のようだし」

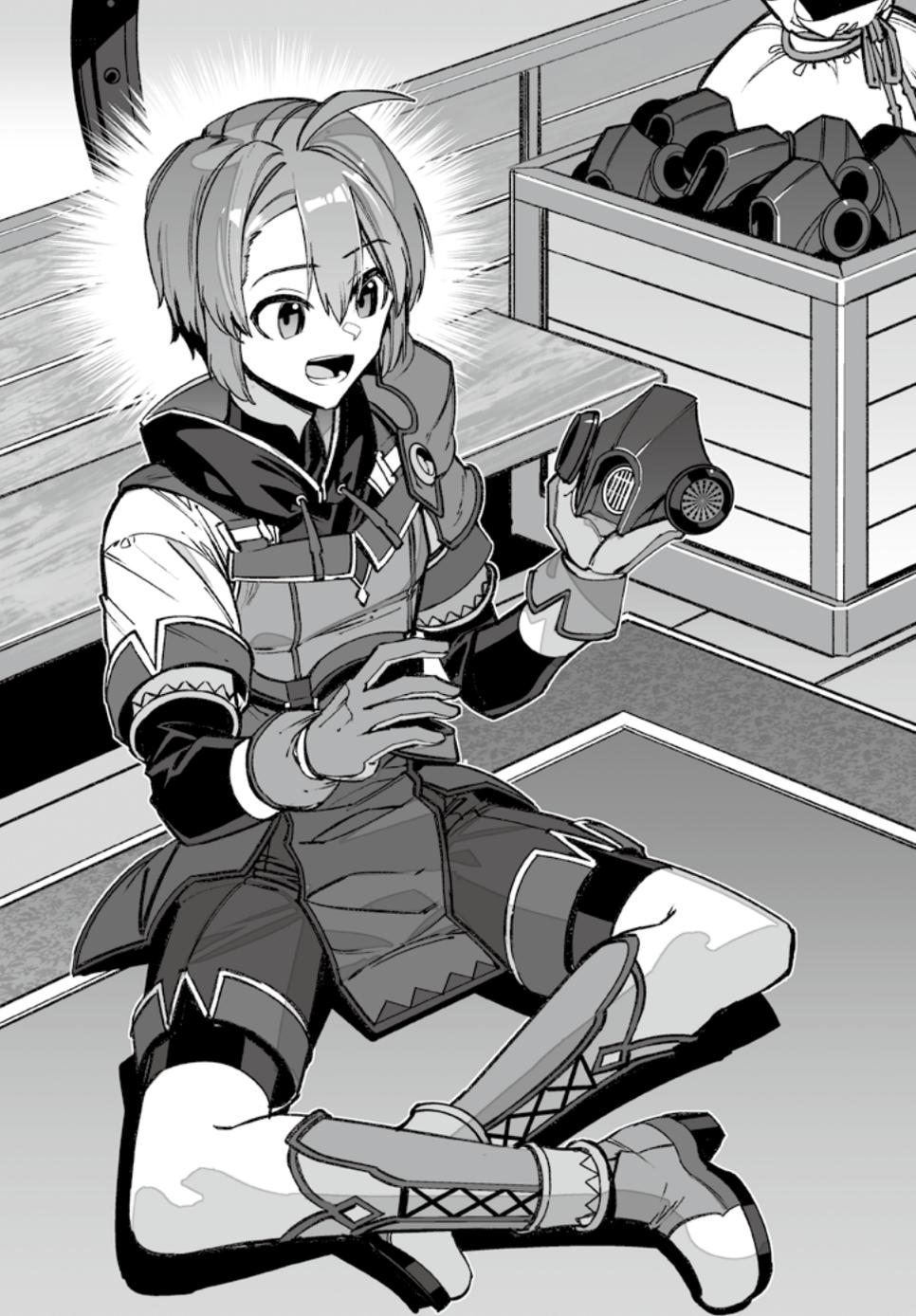
結局、收容所にはゴルノヴァアさんの手がかりはなかったけれど、次の目的地が決まった。



私——ユーリシアたちは、收容所を出てリーゼたちと合流して、第七十七居住区を目指していた。山道を越えたので、馬のデクを地上から連れてきて荷車を曳かせ、行人人を装って移動している。デクは温かな性格だけ力が強く、荒れた街道でも馬車を曳く力がある。

と言っても、ここまでスムーズに馬車が進むのは、デクの力ではなくクルトが用意した餌エサの効果と、馬車が規格外の性能を誇っているからだ。しかも幌カバに特別な工夫をしていて、邪素が馬車の中に入っていないようになっている。

ヤマトの国でも活躍したクルト製の馬車だけど、ほとんど揺れない。空を飛んでいるんじゃない



かと錯覚するほどだ。

昼はこうして心地いい馬車に乗って移動。

夜になるとニーチェを植えてアクリの転移で地上に戻って、サクラのみんなと飯を食って自分の部屋のベッドで寝る。お陰で本来、野宿をする時に必要な見張りの必要もない。

……これ、本当に未知の世界を探索していると言えるのだろうか？

冒険者としていろんな場所で旅をしたけど、これは本当に旅と言っているのか？ まだヤマトの国を旅している時の方が、緊張感があったぞ。

とはいえ、以前のワイバーンの件もあるからな。油断はできない。

「……ところで、クルト。さつきから何を作ってるんだい？」

荷台の中でクルトが何かを作って、リーゼとアクリがそれを箱詰めしているのは、御者をしながら肩越しに後ろを見てわかったんだけど、それ以上のことはわからなかった。

「邪素吸着マスクです。僕たちはこの邪素を無効化するアクセサリーのお陰でマスクがなくても活動できますが、まだまだこの世界では需要があると思うんですよね。行商人のふりをするなら、ついでに売ればいいかなって。ミレさんが持っていたものをもとに研究して、持続時間が十倍くらい続くように、さらに邪素を簡単に洗い流せるように改良しました」

「さすがクルト様です。一目見ただけで、長年使われていたマスクの改良点を思いつくとは」

「この馬車の中なら、邪素もパパが作ったオーブのお陰で無効化レベルに薄くなってるから安心して保管できるね」

「たまたまですよ。最初にこのマスクの構造を思いついた人の方がずっと凄いです」

クルトは謙遜けんそんして言うが、そこまで効果が変わると、もう別物と言っていると思うぞ。

「どうか、一体いくつ作ってるんだ？ 居住区の外で働くハンターはそれほど多くないから、そ

こまでマスクは必要ないと思うぞ？

「という野暮なツツコミはしない。」

「平和だなあ」

私がそう呟いた時だった。

前方に複数の影を見つけた。

ここからだとはよく見えないが、魔物だとしたら数が多し。

できれば避けて通りたいな。

私は手綱を引き、馬車を停める。

「クルト、双眼鏡を！」

「はい！ アクリ、お願い！」

アクリの転移の力で、手元に双眼鏡が飛んできた。

礼を言って双眼鏡越しに影を確認する。

「ユーリさん、魔物ですか？」

「……違う。人だ。しかも十人や二十人じゃない。百人近い人間が移動してる」

「まさか!? 見間違いないやありませんの？」

リーゼがそう言うのも無理はない。

私たちはのんびりと移動しているが、この邪素に満ちた世界において、人が移動するというのは大変危険な行為だ。

邪素だけではない。

いつ禁忌の怪物が現れるかもわからないのだ。

リーゼが隣に座り、双眼鏡を使って自分の目で確認する。

そして、すぐにそれが真実だと気付いた。

「あの方向——目的地は私たちと同じでしょうね。別の居住区からの避難民でしょうか」

「その可能性が高いな……あっ、誰か倒れたぞ!？」

「急いで行きましょう!」

クルトが叫んだ。

本来、ああいう難民の行列に不用意に近付くとトラブルのもとになるので、リーゼのような要人

やクルトやアクリのような非戦闘員を近付けたくないんだが……しかしここで見捨てることはできないか。

リーゼの護衛を約束したミミコに内心で謝罪しながら、私はデクに速度を出すように命令した。

近付いてわかったが、倒れた人は幼い子を抱いた母親だった。

一人の男性が付き添ってるが、旦那だろうか？

私たちに気付いて、助けを求めるように大きく手を振っている。

彼も周囲の人間も、武器を持っている様子はない。

馬車を停めると同時に、クルトが飛び降りた。

「クルト、勝手に動くな！」

私も急いで追いかける。

しかし既にクルトは倒れた女性の容態を見ていた。

「邪素は……大丈夫。疲労と寝不足が原因のようです。すみません、この人を馬車に運びます。

ユーリシアさん、手伝ってください」

「わかった」

「あなたは子どもをお願いします」

クルトはそう言って、女性が抱いていた子どもを男性に託す。

しかし男性は、まるで子どもと接したことがないような危なっかしい抱き方だ。

父親じゃないのか？ 危なっかしくて見られない。

「リーゼ、その子を頼む」

「わかりました」

リーゼが男性から引き取って、子どもを抱く。

「あんたも馬車に乗りな。中は邪素が入ってこないようにしてあるし、食糧もあるからもう大丈夫だ。事情も聞きたいからな」

「恩に着る。彼女は俺の兄の嫁と息子でな。何かあったら死んだ兄に申し訳が立たないところだった」

男が頭を下げた。

クルトが看病を始めた時点で、もう心配はいらない。

馬車に入ると、女性は小さな寝息を立てて横になっていた。

男が邪素吸着マスクを恐る恐る外して呼吸をする。

「本当にマスクが必要ないんだな……前に本屋が同じような童車を使っているのを見たが、輸送隊から買ったのか？」

「似たようなものだ」

同じような効果の乗り物があるのか？

よく知らないので誤魔化しておく。

「それで、あんたらは何者なんだ？」

「見ての通り、避難民さ。俺たちの住んでいた居住区の結界が壊れたから、新天地を求めて第七十七居住区を目指している」

地図を開いて、彼らがいた居住区を教えてもらった。

ここからかなり離れている。

あの女性だけでなく、ここに来るまでに多くの人が脱落したのかもしれない。

「なんで第七十七居住区なんだ？ 大きな居住区だつてのはわかるが、もっと近くに別の居住区もあるだろう。さすがに遠すぎるだろ」

「つい最近、第七十七居住区に、聖女様が現れたからだ」

「聖女？」

「ああ。奇跡の力で人々を救う聖女がいるという話を聞いた。医者が匙さしを投げた怪我や病気でさえもたちまち治し、不思議な力で荒れた大地に作物を実らせたという」

「事実なのか？」

「実際のところはわからんさ」

男は首を横に振った。

仕事で別の居住区に手紙を届けに行くために立ち寄ったハンターに教えてもらったそうだが、そのハンターも噂で聞いただけだという。

又聞き之又聞き。

信憑性しんぽうせいはないに等しい。

「それでも、俺たちはその噂だけが頼りだったんだ。最近、あちこちの居住区の結界が動作不良を起こして機能停止に陥っている。どこの居住区も、俺たちのような避難民を受け入れる余裕なんてない。聖女の奇跡マジックに縋すがるしかないんだ」

男は悲痛な面持ちでそう語った。

やはり居住区の結界は、どこも動作不良が起きているようだ。

経年劣化によって同じタイミングで単純に故障しているとか？

結界装置を直して回ればいいかもしれないが、そんな余裕はない。

いっそのこと、こいつらを今すぐに地上に連れて……いや、地上の受け入れ態勢はまだ整っていない。

これだけの数を連れていき、旧世界の存在が明るみに出ればどんな混乱が起きるか。

いっそのこと、本当に聖女がいて、奇跡でも起こしてくれたらいいんだけどな。でも、どんな怪我でも治し、荒れた土地を一瞬で治すような奇跡を起こす人なんているわけが……

いや、割というわ。

私はクルトを見て考えを改めた。

クルトを含めハスト村の人間なら、どんな怪我でも一瞬で治す薬を作ったり、荒地どころか砂漠を緑あふれる土地に作り変えたりした実績がある。

そのような奇跡を起こせる人間なら、聖女と呼ばれても不思議ではない。

今は情報が欲しいな。

「なあ、その聖女の情報、他に何かないのか？ ……戦闘以外のスキル適性がSSSランクとか、褒められると気絶するとか」

後半はクルトにあまり聞こえないように小声で尋ねた。

「そういう噂は聞いたことがない。知っているとしたら——」

男は少し間を置いて、私たちにとつて一番重要となる情報を提示した。

「マーレフィスという名前くらいだ」

旧世界にも夜は来る。

分厚い雲のような霧に覆われ、星の光も届かない。

そんな状態だから、月が出ているかどうかともわからない——そもそも旧世界に月があるかどうかもわからない。

「アクリ、頼んだ」

「うん」

アクリの転移魔法の力で、手紙を工房に送る。

いつもは夜になると工房に戻って、空調魔道具のお陰で温かい部屋で羽のように軽い布団にくるまれて柔らかいベッドの上で眠ることができるのだが……

「さすがに戻れないよな」

現在、私たちは難民の列からつかず離れずの位置で、休憩を取っている。

途中、何人が脱落する者が現れ、その都度馬車で治療するものだから、今や私たちの馬車は戦場の野戦病棟のような状況になっていた。

脱落する人の大半は、寝不足と疲労が原因。

そして彼らが休んでいない原因は、邪素吸着マスクにあった。

このマスクは邪素を無効化するマスクだが、邪素をなくすわけではない。

その名の通りマスクの表面に邪素を吸着させ、体内への侵入を防ぐマスク。そして、その吸着できる邪素の量には限度がある。

マスクの限度を超えると、徐々にだが体内に邪素が入っていき、いずれ死に至る。それを避けるには、マスクの効果も切れる前に居住区に辿り着かないといけない。そのため、彼らは寝る時間も惜しんで歩き続け、疲労が溜^たまつていったのだ。

——しかし、その問題をクルトが解決した。

クルトが馬車の中で作っていた、新型の邪素吸着マスク。

これらを私たちは、そこそこの値段で販売した。

無償で譲ってもよかったが、それをしてしまえば、何か裏があるのではないかと疑われるだろう。しかし、金を取れば少なくとも金額分の価値があると彼らは思うだろう。

もちろん、居住区を棄てて難民となった彼らだ。まともな金があるわけではない。

そのため、後日彼らの居住区を私たちが訪れ、彼らが残してきたものを貰ってもいいという約束を取り付けた。

どのみち結界のない居住区はいずれ魔物に荒らされてしまうのだ。価値のある家具や資材も残っているだろうが、捨ててきたも同然。

それらを渡すことで高性能の邪素吸着マスクが手に入るといふのなら、濡^ぬれ手で粟^{あわ}の申し出だっ

たろう。

マスクの寿命に余裕ができた彼らは、久しぶりの睡眠を取った。

もちろん、マスクを外すことはできず、ベッドどころかまともな毛布すらない。それに魔物を警戒して警備も必要だ。

ゆっくりは眠れないだろう。

それでも、これまでよりははるかにマシなはずだ。

ちなみに、クルトが食事の提供をしようかと言ったが、私が辞めさせた。

私たちの食糧に余裕がないわけではない。

ただ、彼らとクルトにはあまり仲良くなつてほしくない。

いまから行く第七十七居住区で、彼らが確実に受け入れられるとは思わない。

というか、私の予想では受け入れられない。いくら第七十七居住区が大きくても、住民の数には限度がある。

小さな子どもがいる家族数組が受け入れられたら上出来だろう。

なら、残りの奴らはどうなる？

だが、聖女という標^{しるし}を失った彼ら。

別の居住区を目指すにしても、一丸となって行動するとは思えない。

人数が多ければ多いほど受け入れが困難なのは、彼らも身に染みて理解するだろう。

当然、バラバラに居住区を目指す。中には打ちひしがれて、第七十七居住区の前から動かず絶望のまま倒れる奴らも現れるかもしれない。

地上で彼らを受け入れられない以上、私たちに全員を助けることはできない。

彼らと仲良くなれば、助けられない彼らの分、クルトが苦しむことになる。

それを伝えたら、クルトはどうにか納得はしてくれた。

「それにしても、聖女マーレフィスか……」

「そうですね。マーレフィスさんが聖女になっているなんて驚きました。ゴルノヴァさんも一緒にいたらいいですね」

私がぼつりと呟くと、クルトが感心するように言った。

「クルト様、そのことですが——」

「ああ、きつと聖女マーレフィスは——」

「私の知ってるマーレフィスとは別人だ（です）」

私とリーゼは声を揃えて言った。

「マーレフィスが聖女？ ありえないな」

「そうです。たしかにこの世界では魔法の使い手がいなかったため、回復魔法があれば最初はもてはや

されるでしょう。ですが、すぐに化けの皮が剥がれ落ちて魔女扱いされ、異端裁判で死罪になるに決まっています」

「そんなことはありません。マーレフィスさんはたしかにちよつと怒りっぽくてすぐに雷の魔法を使っちゃうことがあるのと遺跡に落書きをした前科はありますが、とても優しい人ですよ」

クルトがマーレフィスを弁護する。

炎の竜牙にいた時はかなり酷い仕打ちを受けていたらしいのに、なんでそんなに信用できるのか。

まあ、クルトが率先して誰かのことを悪く言った記憶がないので、こいつにかければ、どんな凶悪犯でも根はいい人と言うかもしれない。

性善説を地で行く奴だからな。

だが——

「仮に件の聖女がマーレフィスだとして、噂はどうなる？ 怪我の治療については回復魔法でどうにかならずとも、回復魔法では病気は治せないだろ？ 簡単に病気を治せるとしたら——」

「噂に尾ひれは付き物ですが、しかし大地に作物を実らせるなど、そんな奇跡ができるのは——」

そこまで言ったところで、私とリーゼ、そして話を聞いていたアクリがクルトを見た。

そういえば、ゴルノヴァとマーレフィスがこちらの世界を探索することになった時、クルトがマジックバッグにいろいろなものを入れて持たせていた気がする。

その中身はたっぷり食糧と簡易の生活用品くらいだと思っていたが——
「ね、ねえ、パパ。マーレフィスさんに渡した荷物の中に、薬と植物を育てる道具みたいなもの
あった？」

アクリがおそろおそろ尋ねた。

「うん、あったよ。僕が普段使っているものと同じ常備薬と、あとは新鮮な野菜が食べたくなった
時に使える成長促進を施した種。と言っても、僕の渡した常備薬なんて簡単な病気は治せても記憶
を失う風土病みたいなよくある病気すら治せないし、成長促進を施した種だって蒔いてから作物が
実るまで半日はかかっちゃうから、やっぱり別人なのかな」

クルトが残念そうに言うが、私たちは逆に、確信が変わる。

聖女の正体は、絶対私たちの知るマーレフィス本人だ。



ブックマンと出会って一日。

その間に私、マーレフィスはこの世界について様々なことを学びました。

この世界で人々は、居住区と呼ばれる結界に守られた街に暮らしているそうです。

その結界のお陰で、この世界に蔓延する瘴気——こちらの世界では邪素と呼ばれているそうです
が——や時々現れるという禁忌の怪物から生き延びることができたとのこと。

しかもその居住区の数は、十や二十ではないそうです。

一体何人の人間が生き延びているというのか。

バンドナから頼まれた調査の結果としては、これだけで十分でしょう。

だいたい、その全員を地上に連れて帰るなんて、私一人ではどうにかできる問題ではありません。

ただ、この世界は随分と面白い発展を遂げているようですね。

私を驚かせたのは、彼らの使うスキルという技術です。

腕輪に魔石をはめ込むことで使えるようになる、魔法とは全く違う、独自の力。

己の身体を鉄のように硬くしたり、あつという間に写本を生み出したり、武器に力を込めたりで
きるそうです。

そして、治癒スキル。

自分の怪我を一瞬で治すスキルはあるそうですが、他者を癒す力はないとのこと。

また、スキルを使うには、適性が必要だそうです。

ブックマンが治癒のスキルを使っても自分の脚を治せなかったのは、治癒スキルの適性が低かつ
たからなのでしょう。